

学会参加報告

日本小児保健協会学術集会での学び
～多職種と連携した母子保健活動～

浦添市 健康推進課

保健師 宮 良 千 晶

「愛おしい子どもたちに～今、私たちにできること～」をメインテーマに第59回日本小児保健協会学術集会が岡山コンベンションセンターにて開催されました。様々な講演や演題発表、シンポジウム等とおして、小児をとりまく様々な分野におけるこれまでの歴史から最新の取り組み、研究等について幅広く学ぶ事ができました。その中から特に印象に残った内容を報告いたします。

1点目は、「発達支援」についてです。今回の学会では発達障害について多く取り上げられており、谷池雅子先生による特別講演や、「ふだんのかかわりから始める発達支援～多職種が連携した子育て支援の輪の中で～」というテーマのもと行われたシンポジウムが特に印象的でした。谷池先生の講演では、脳の機能から発達障害を考える事のできる大変貴重な内容でした。これからも脳のメカニズムを含めて子どもたちの発達を考え、保健指導に活かせるよう、学習を深めたいと思います。シンポジウムでは、保健・保育・教育・医療など多職種による主な取り組みや現状、意見等を聞くことができました。市町村では乳幼児健診を通して多くの親と子どもに出会う機会があります。私たちの気づきと親の気づきや困り感が一致しないことも多く、経験の浅い私にとってはその介入に戸惑うことも多くあります。自分自身の軸を持って見立てを立て、実際に子育てをしている親へどう寄り添い、何が支援できるのか、タイミングをみながら介入していくことが必要なのだと思いました。また、市町村、保育所、教育現場、医療それぞれで支援が途切れてしまうことも

多く、親と共に関係機関が連携し、それぞれの専門性が活かされる支援をしていきたいと思えます。

2点目は、磯部健一先生による「小さく生まれた子のフォローを考える」という講話内容でした。平成25年度から未熟児養育医療が市町村業務となるので、低出生体重児のフォローを今後どのように進めていくか、改めて考えさせられました。浦添市でも出生児の約1割は低出生体重児です。低出生体重児は生まれた直後の医療管理や、その後の発育・発達面でのフォロー、家族への支援など、その特性を理解し行っていかなければなりません。今回の講話内容にもあったように、低出生体重児の増加の背景として日本人のやせ願望との関連が大きいという部分など、生まれてからのフォローだけではなく、低出生体重児を予防する視点を持って今後の支援体制を整えていく必要性を感じました。

今回、学会以外でも小児医療・保健の現場でご活躍されている先生方と、たくさんの意見交換ができたことも貴重な経験でした。今回の学会を通して、医療・保健・福祉・教育など子どもたちをとりまく様々な職種と連携する中で、保健師に求められていることに改めて気づいた部分も多くありました。今後も母子保健行政に関わる立場として、幅広い知識や技術を習得し、住民との関わりや施策への反映を通して、住民に貢献できる保健師として精進していきたいと思えます。今回、このような学会に参加できる機会を与えていただいた小児保健協会および関係者の皆様に感謝申し上げます。

学会参加報告

母子担当保健師としてできること

豊見城市役所

保健師 上原 怜華

「愛しい子どもたちに～今、私たちにできること～」をメインテーマに、第59回日本小児保健協会学術集会在岡山コンベンションセンターで開催されました。

その中から印象に残った内容を報告します。

初日は、「虐待の連鎖を断ち切る支援とは～親子と向き合う我々に、求められている、できること～」をきくことができました。虐待のリスクを抱えた家庭は、乳幼児健診が未受診であるなど、公的サービスにのりにくい家庭であることが多いことを改めて認識しました。自ら訴えてこない養育者は、情報が届きにくかったり、サービスを利用する手段や、利用する力がない場合があります。そんな親御さんへは私たち保健師による「家庭訪問」で、適切な支援をしていくことが大切であることがわかりました。そして、SOSを発信している親子を見落とさないように、十分な知識と経験を積むことが必要だと感じました。また「最近では、困ったことを排除し過ぎて、困ったことに直面した時にどうすればよいのか分からなくなっている。本来は、困ったときは周りに相談し、一緒に考える。これが育ちの過程である。」とのお話をきき、困った時には周りに相談するというのを、幼い時から子どもたちに伝えることが大切であると感じました。

「わが国の小児保健 百年の歩み～戦後50年で乳児死亡率を世界最低にできた背景を考える～」ではその背景の1つに、妊娠届出による妊婦の把握と健診・医療、母子健康手帳の制度化、行政による母

子保健医療への支援と充実が挙げられていました。妊娠から出産まで行政や医療機関等で、必要な支援が途切れることがないように、多職種とも連携をとることが大切だと思いました。

企業学術ランチ企画の「乳児早期のワクチン接種意義とスケジュール」において、適性接種時期は「接種可能月齢に達したとき」というのを改めて確認しました。乳児期に多くの予防注射を受けることに対し、保護者がためらうことがありますが、この様な保護者に対しては、予防接種の効果について丁寧に説明する必要があると感じました。

最終日、「沖縄県の10年間の乳幼児健診データの解析～乳幼児の栄養法と貧血の推移～」はとても興味深いものでした。この10年間で母乳栄養の児が増加していると同時に、貧血の児の割合もやや増加している可能性があること。そしてこの10年間に於いて貧血の有病率に変化がないことに驚きました。母乳栄養には多くの長所があります。それらを活かしつつ貧血の子どもの数を少なくしていくために、栄養士と協力し、指導の在り方を考えていく必要があると感じました。

今回の学会では、沖縄県から参加した小児科の先生方や、保健師の皆様とご一緒させていただき、色々なご意見を聞くことができました。この研修を今後の保健活動に活かしていきたいと思えます。研修の機会を与えて下さった沖縄県小児保健協会の皆様に感謝申し上げます。